

発行日：
2019年12月5日

エコプロ 2019 特別編集版 APP 環境新聞

発行者：
エイピーピー・ジャパン
株式会社

私たち APP は、インドネシアで生まれた、紙とその原料であるパルプを作るメーカーです。紙とパルプを作るには木が必要ですが、インドネシアの豊かな自然を守るにはどうしたら良いのか？ そんな想いを抱えながら新聞を作成しました。

インドネシア その将来性と課題

環境保護と経済発展のバランスが課題

私たち APP は紙を作る会社で、インドネシアにあります。インドネシアは1万7千以上の島が集まった東南アジア最大の国。手つかずの美しい自然が多く残っています。490以上の民族が暮らし、多くの人々がイスラム教を信じていますが、キリスト教や仏教、ヒンドゥー教を信じる人たちもいて、仲良く暮らしています。島と島との行き来が大変だったために経済発展が遅れていましたが、2000年代に入ってから年約5%という速さで大きく経済成長しています。自動車産業、総合商社、小売業など、日本の企業も数多くインドネシアに進出しています。

人口の割合を見ると子どもと若者が多く、社会はエネルギーにあふれています。しかし、国民の平均収入は日本人の10分の1以下。ジャカルタなど大都市で働く人々の中には豊かな人もいますが、人口の約20%は1日1.25ドル（約140円）以下で暮らす貧しい人々です。そうした人々の中には森で暮らし、生活に困って違法な森林伐採や焼き畑をする人もいます。

インドネシアには、南米のアマゾンやアフリカのコンゴと並ぶ世界三大熱帯雨林があります。この森を守ることと貧しい人々が豊かに暮らせるようになること。そのふたつを両立することが、これからのインドネシアの課題です。



インドネシア 2015 人口: 255,708,000
日本 2016 人口: 126,323,000



インドネシアと日本の人口ピラミッド比較

キラキラの国・インドネシア

インドネシア語でキラキラとは「だいたい、およそ」のこと。約束した時間は、「キラキラ」なのであまり守られなかったりしますが、みんないつも大らかです。また、熱帯性の一年中暑い気候だからなのか、大人も子供も甘いものが大好きで、コーヒーやお茶も甘くして飲んでいます。

APP ジャパンはSDGs達成への貢献を真剣に考えています



APPの日本法人であるAPP ジャパンは、インドネシアや中国の工場で作られた紙製品を日本で販売していますが、この仕事が国連の持続可能な開発目標（SDGs）にどう貢献できるかを真剣に考えています。社内でSDGsタスクフォースチームを作り、今年3月から毎月1回、話し合いを続けてきました。自分たちの想いや取り組みをどのように伝えれば皆さんに届くかを議論し、紙芝居での説明や、APPという会社を説明する前にインドネシアの環境問題からお伝えすることなど、今回の「エコプロ2019」でも、この会議で話し合った内容をベースに展示しています。



今年も焼き畑を原因とする森林火災が拡大



森林地域の住民が森を切り開いて畑にする際、大昔から木を切る代わりに森に火をつけて一帯を焼いて開墾する「焼き畑」が行なわれてきました。木を切るより簡単で、雑草も一緒に焼けるうえ、残った灰は肥料になるため、人手とお金がない貧しい住民にとっては、理にかなった方法なのです。

ところが、近年は焼き畑のために火をつけると、それを鎮火できずに燃え広がって大規模な森林火災になることが増えてきました。

その理由は、気候変動の影響によってエルニーニョ現象が頻発し、インドネシアで降る雨の量が減ったこと、泥炭地と呼ばれる湿地帯が開発のために乾燥し

て火が付きやすくなったこと、人口が増えてより多くの人が収入を求めて焼き畑を行うようになったことなどです。

2015年には250万ヘクタールものインドネシアの森林が焼けてしまい、その煙が隣国のマレーシアやシンガポールまで届く煙害の問題に発展しました。2019年もエルニーニョ現象によって80万ヘクタール以上が焼けたといわれています。

紙を使うと木がなくなるの？

かずき「紙は木を切っつくるんだよ。お姉ちゃん、知ってた？」
さき「知ってるわよ。だから、紙を使えば使うほど、木が減っちゃうんじゃないかしら。心配だわ」

パパ「そうだね、地球は昔、森でおおわれていたんだけど、人が木で家を造ったり紙を作ったりしてきたことで、森がずいぶん減ったんだ」

さき「このままだと、世界中から森がなくなってしまうのかしら」

かずき「再生紙を使えば木は切らなくていいんじゃない？」

パパ「たしかに紙をリサイクルしたのが再生紙だね。だけど、紙の原料であるパルプの繊維が弱って紙の強度が保てないから、リサイクルできるのは5~6回といわれているんだよ」

さき「じゃあやっぱり木を切らなきゃいけないのね」

パパ「そうだね。だけどパパが働いているAPPという会社はインドネシアに広い植林地、つまり木を育てる畑を持っていて、そこで採れた植林木だけで紙を作っているから、自然の森を一本も切らずに紙を作っているんだ。みんなが食べる野菜やお米は畑や田んぼで作るだろう？それと同じように木も植林地で育てているんだよ」

さき「でも、木が大きくなるのになん十年もかかるでしょう？なかなか収穫できないわね」

パパ「それがインドネシアの熱帯性気候と、木の品種改良のおかげで、たった6年で高さ30メートルに育つんだよ。だから、土地を6区画に分けて毎年1区画ずつ植えることで、毎年1区画から木を収穫することができるんだ。僕たちも、木のおかげで便利で豊かな生活ができることを感謝しなければいけないね」



支援を受けて野菜を作る女性

筑波大学附属坂戸高校が APP ジャパンのオフィスを訪問

筑波大学附属坂戸高校の生徒さんたちは2015年から毎年、インドネシアにおいてフィールドワークを行う際に、APPの植林地や紙パルプ工場、ゾウの保護エリアを訪れています。今年11月には同高校の生徒さん8名がAPPジャパンを訪ね、学習成果を発表し、環境問題などの質問を行いました。生徒さんたちはAPPからの回答を聞き、「インターネットだけの情報を信じるのではなく、人から直接聞いて初めて分かることがあった。」と話していました。



APPの環境の取り組みを詳しく知るには、当社ウェブサイトをご覧ください。 <http://www.app-j.com/>